

沖縄県宇地泊区自治会による特定外来生物シロアゴガエル大量放流事件とその後

嶋津 信彦

しまづ外来魚研究所

<https://shimadzu1984.wixsite.com/gairaigy>

シロアゴガエル *Polypedates leucomystax* は、東南アジアを原産とする体長 5~7cm のアオガエル科のカエルである。水際や樹上などに泡巣を形成し、産卵する。日本では沖縄島で 1964 年に初めて記録されて以来、物資に紛れるなどして南西諸島で分布を拡大している。本種は在来のカエル類に対して競争などによる影響が危惧されており、2006 年に特定外来生物に指定されている。特定外来生物の生きたままの運搬や放流などの行為に対しては、個人には 3 年以下の懲役または 300 万円以下の罰金が科せられる。

報道によれば、2021 年 8 月 23~25 日に沖縄県宜野湾市の水路において、隣接するしちやばる公園でラジオ体操に参加してきた子供たちにより、約 400 個体のオタマジャクシが放流されたという。放流は、宇地泊(うちどまり)区自治会により企画され、当初メダカで予定されていたが増殖に失敗したため、代わりに北部にある自治会長の畑で採集されたオタマジャクシで実施された。9 月 27 日に環境省沖縄奄美自然環境事務所から自治会へ、放流されたオタマジャクシがシロアゴガエルであった可能性が高いと連絡が入り、10 月 1 日までに自治会により約 300 個体のオタマジャクシが駆除された。しかし、環境省は放流したものがシロアゴガエルだったという断言はできないとして嚴重注意にとどめ、自治会長らが特定外来生物法違反で裁かれることはなかった。

著者は 9 月 20 日の新聞記事で放流を知り、26 日に同水路でシロアゴガエルのオタマジャクシと鳴き声を確認、他のカエル類が確認されなかったことから放流されたオタマジャクシがシロアゴガエルであった可能性が高いとして 27 日に環境省に通報した。以降 10 月 31 日まで計 15 回、水路を訪れ、シロアゴガエルの成体、オタマジャクシおよび泡巣の有無などを目視で確認した。さらに沖縄島中部における本種の産卵期が 5 月初旬から 11 月中旬頃までとされていることから、2022 年には 5 月 7 日~11 月 16 日に計 33 回訪れ、同様に調査した。結果、本種は 2021 年に成体が 3 回、オタマジャクシが 10 回、2022 年には成体が 12 回の調査で確認された。成体は、1 回で多くとも数個体ほどの確認にとどまり、体長も小さかった。環境省より採集を自治会に任せるように指示されていたが、2022 年 9 月 2 日以降に成体 5 個体を採集し、1 個体を採り逃がした状態で確認できなくなり調査を終えた。オタマジャクシは 2021 年 10 月 16 日まで毎回確認されたが、水面を浮草が覆ったため確認できなくなり、2022 年には浮草も減っていたが確認されなかった。また道路によって 3 つに分断された水路のうち最も公園に近い水路からのみ確認された。泡巣は調査期間を通して確認されなかった。繁殖が確認されなかったことやオタマジャクシの分布の偏りから、放流が行われる以前よりシロアゴガエルが生息していた可能性は低いと考えられる。

放流が行われた水路は、近年整備されたものであり、暗渠から導水される予定であったが、人体に有害とされる有機フッ素化合物が検出されたため、雨水のみで水域が維持されているという。飛来したトンボ類やゲンゴロウ類、マツモムシ類などのほか、暗渠から遡上してきたと考えられるヌマエビ類やテナガエビ類、オオヒライソガニ、ヨシノボリ属なども確認されており、開発により全域が暗渠にされてしまった水系の在来生物にとって重要な生息場所になっていると考えられる。一方で品種が維持されたグッピーやホテイアオイ、特定外来生物のボタンウキクサなどの外来生物が確認され、環境省の注意喚起後も 2021 年 10 月 29 日にはカワズメ属、2022 年 5 月 7 日にはキンギョが新たに複数見つかかり、外来魚が度々放流されていると考えられる。放流されたオタマジャクシがシロアゴガエルであったことは間違いなく、地域の外来生物に対する問題意識を高めるためにも徹底して責任が追及されることを望む。